さくらんぼがり 8

さくらんぼがり 8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20031348

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, 攻めフェラ, ショウ霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回はショウ霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、もぶお兄さん×師匠を含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

さくらんぼがり 8

チラッと霊幻は壁掛け時計を確認する。
「そろそろ出張除霊に出かけた方がいいな。芹沢」
「あ、はい」
「ちょっと待て」
出かける支度をしようとした２人を鈴木統一郎が止める。
「監視対象の能力者がバラけるのは困る」
「は！？でも能力者が１人は欲しいし……」
「ならば将を連れて行け」
「はぁ！？」
漫画雑誌を読んでいた鈴木将が驚いて取り落としそうになる。
「実力は申し分無いはずだ」
「将くんたぶん俺より強いですよ」
芹沢の言葉に霊幻は目を見張る。
「しかし未成年を初めて現場に連れて行くとなると……せめて慣れている誰かをもう１人は連れて行きたいですね」
「将なら大丈夫だろう」
うちの息子に何か文句あるのか、と言いたげな統一郎の目に霊幻は冷や汗を垂らす。
「まー平気だと思うよ。戦闘慣れもしてるし。親父も仕事だからさぁ、融通きかせられねぇんだと思う。頼むよ、霊幻サン」
将の言葉にしばし霊幻は悩む。
「……分かりました。将くんの身柄は一時この霊幻新隆が預からせていただきます」
す、と真っ直ぐ統一郎を見つめて。
「かならず無事にお返しします」
静かだがはっきりとした声に、統一郎でさえ気圧された。
「あ、ああ」
す、と霊幻は将に視線を向ける。
「じゃあ将くん、仕事の準備してくれ」
「了解」

「芹沢、必要なもの教えてやってくれ」
「分かりました」
芹沢が外回り用の鞄を持って、その中から懐中電灯などを将に渡していく。
「鈴木くん」
茂夫が不安そうに声をかける。
「……気をつけて」
その言葉に、軽く将は頷いた。

※

「このビルの中でラップ音がして入居者が逃げるから、調べて欲しいってのが依頼だ」
「ふーん、ボロいから老朽化じゃねぇの？……ですか？」
「慣れてないなら無理に敬語を使わなくていい。緊急時に意思疎通が遅れる方が困るからな。……老朽化かどうか調べるのも俺の仕事。さ、行くぞ。足元気を付けてな」
「うぃっす」
駅前に程近い、本来は商店街のように小売店が多数入っていたと思われるビル。
現在はラップ音のせいで２、３店しか出店していないと依頼主は言っていたが、その前からさびれていただろうことは見れば分かる。
「じゃ、上から見てくか」
２人はエレベーターに乗り込んだ。
ぼんやりと階数表示を見ている霊幻の横顔を、そっと将は盗み見る。
（普通のオッサンの顔だ）
この人が超能力者たちを喰い荒らしたという事実が将には信じられない。
（俺も誘われたりしたらどうしようって思ってたけど）
そんなそぶりも無いのが、将には余計に不思議だった。
誘いもせずに、あれだけの数の男を手玉に取るなんて、どうやっ

て？と首を傾げる。
「将くん」
「あ、はい」
突然、色の薄い瞳に見つめられてドキっとする。
「着いたぞ。気を付けてな」
「は、はい」
ふいっと扉をアゴで指す霊幻に、何ドキドキしてんだ俺は、と将は同じ方を向いて気を逸らす。
「……」
「……」
黙々と暗い室内を歩いていく。
たまにパキッ、メキッと音がする度に、霊幻は将を振り返る。
が、将は首を振るばかりだった。
「ただの家鳴り」
「そうか」
それを６階分繰り返して、２人は入り口に戻ってきた。
「悪霊とか能力者の気配は無かったぜ。気のせいじゃねぇの？」
「うーん、じゃあ一応お祓いして帰るか」
懐からただの食塩を取り出した霊幻を将は薄目で見る。
（この人一体何してんだ？）
霊はいない、っつったのに、お祓いも何も……と胡散臭い人間を見る目で見て呆れていた、その時だった。
「……っ将くん！」
将は思いっきり霊幻に突き飛ばされてすっ転ぶ。
「いってぇ！何す……！」
ずどどど、と石つぶてが霊幻に刺さり、吹っ飛んでいくのを将は呆然と眺めていた。
（……！しまった！）
はっとした時には血溜まりに霊幻が横たわっている。
（完全に遅れを取った……！ちくしょう、敵はどこだ！）
また石つぶて。今度は将はバリアで防いだ。
（霊幻さん狙い……！）
将は迷う。撤退して霊幻を病院に連れて行くべきか、敵を倒してし

まうべきか。
（どうする、どうする、どうする……！）
「……っ、俺は大丈夫だ！敵を先に頼む！！」
霊幻の叫びにはっとする。
（そうだ、迷えば迷うだけ敵に隙を与える……！！）
目を凝らすと、何てことは無い。
１階のホールの奥に、腐りすぎて性別の分からない、人のような何かがいた。
（そんなに強ぇ悪霊じゃない……だけど）
うずくまる霊幻のそばを離れることを躊躇ってしまう。
（霊幻さんにバリアを張りながら、敵に攻撃して……そんなことやったことねえぞ！？）
自然、霊幻へのバリアを優先せざるを得ない。
じわりと将は脂汗をかく。
『気を付けて』と言う茂夫の声がよみがえった。
「だいぶ回復してきた。俺は自分で避けるから、将くん、敵を頼む」
そう霊幻に静かに言われて、将の腹は決まった。
（ソッコーで倒す！）
「ク……ラ……メ……う、うううぅ！！」
だっと敵に向かって駆け出した将の動きに気がついた悪霊が、石つぶてを飛ばす。
「ワンパターンなんだよ！」
それを薙ぎ払って将は超能力を纏わせた拳を敵に叩き込んだ。
「ギャアアアア！！」
あっけなく消えていく悪霊に、ホッとした瞬間。
「うわっ……！」
霊幻の悲鳴にはっと振り返る。
「霊幻さ……！」
ズルズルと地中に引き摺り込まれていく霊幻に、すんでのところで間に合わない。
「くそっ、何油断してるんだよ俺は……！」
慌てて念動力で床を破壊して、驚く。

（下は土で埋められてる……！！）
どうやら地下があったらしい空間は、悪霊の最後の悪あがきで埋められていた。
（は、早く助けないと……！！）
将は集中して霊幻の気配を探すが、探り当てられ無かった。
「れ、霊幻さん……霊幻さん！」
将の声がか細く暗い室内に吸い込まれていく。
じわりと将の目に涙が浮かんできた。
（俺のせいだ……！！俺が霊幻さんを守らないといけなかったのに！！）
芹沢なら、律の兄貴ならこうはならなかった。その思いが将を責める。
「霊幻さん……！！」
（こうなったら、これ全部掘り返して……！！）
ばっと両手をかざして将は力を込める。
ぶつ、と何処かの血管が切れて鼻血が垂れた。
「ふんぬうううううう……！！」
「おいやめとけ。死ぬぞ」
死角から声を掛けられて将は飛び上がりそうになった。
「ヨシフさん！？なんで……」
「相談所であんまりにも芹沢や影山茂夫が心配して騒ぐもんだから、鈴木から俺に連絡があったんだよ。様子見てやってくれって」
それを聞いて将は顔を伏せる。
「すまねぇ、俺がついていながら……！！」
苦悶の表情を浮かべる将に、ヨシフはゆるやかに顔を振る。
「坊主のせいじゃねえよ。先生が無茶しすぎるだけだ。……霊幻はこの下か？」
将は目をぬぐいながら頷いた。
「そうか」
ヨシフは地面に耳をつける。
「応援も呼んであるが、多分間に合わん。俺たちで探し出すしか無い」
「探し出す、って」

「ほら、お前も聴いてみろ」
将も地面に耳をつけた。
（し、心臓がうるさすぎて何も聞こえねぇ……！）
「ヨシフさ……」
「黙って、きくんだ」
キッパリと言われて将はしぶしぶ焦る心を抑えて音に集中する。
次第に鼓動はおさまって、呼吸も静かになる。
「……！」
コツコツコツ、コツ、コツ、コツ、コツコツコツ……
微かにだが、確かに何かを叩く音が、地中から響いていた。
「気付いたか。これを辿るぞ。急げ」
２人は必死に地面を這いずって音の発生源を探す。
「……ここだ！」
「よし、掘り起こせ」
将が土を持ち上げると、そこには腕で口の周りに空間を作っていた霊幻が気絶寸前でいた。
「……おせえぞ」
「ほざけ」
ニヤっと笑って気絶した霊幻を土から掘り出し、ヨシフは救急車を呼ぶ。
へたへたへた、と将はその場に座り込んだ。
「お疲れ。……まあ、子供にしちゃあ頑張った方だよ」
ヨシフの慰めに、むしろ将はほぞを噛んだ。

※

霊幻が入院したという知らせに、相談所はざわつく。
「……悪い、俺のせいで」
悔しそうに床を睨みつける将に、慌てて芹沢や茂夫がフォローする。
「仕方ないよ、初めての除霊だし」
「いつもは雑用ばっかりなんだけど、たまに危ない仕事があって……運が悪かったね」

「いやそれは言い訳にはならんだろう」
そして鈴木統一郎がそれを台無しにした。
「ヒト１人まともに守れんのか、将」
「鈴木さん……！」
茂夫が統一郎を諫めるように見つめる。
が、それを将が首を振って止めた。
「親父の言う通りだ。今後はヨシフさんについてきてもらうことにしたよ」
「……ま、未熟さを認められるのはいいことだと思うぜ」
すぱー、と煙草を吸いながら、ヨシフが少しばかりのフォローをした。
「……大人、かぁ」
律がぼそりと誰にともなく呟いた。

※

「よお、心配かけたな」
額に大きな絆創膏を貼った霊幻が相談所に来て、将はようやく肩の力が抜けた。
「その……悪かったよ」
「んあ？何が？」
溜まったお祓いグラフィックの山や、自分の予約を見て霊幻は顔を顰める。
「将くんは大丈夫だったんだろ？なら良かったじゃねぇか」
ガシガシと頭を撫でられて将は顔を赤くする。
「……っ何も良くねぇだろ！？あんな大怪我させちまって……！！」
「いやこれ見た目ほど酷くねぇから。念の為検査入院しただけだから。……仕事上多少の怪我は仕方ないんだよ」
「お前そんな事言ってたら本当にいつか死ぬからな」
エクボが呆れて思わず突っ込む。
「……っアンタなぁ、弱いくせに先々行くんじゃねーよ！あと俺から離れんな！！つーか事務所にいてくんねぇ！？」

「それがねぇ、そうもいかないんだよ」
芹沢が苦笑する。
「師匠が居ないと、文句言ってくるお客さんも多いんだよね……」
茂夫が続いた。
「ほとんどの人に悪霊は見えないからな。納得感が欲しいんだよ」
「師匠は依頼人、納得させるのめちゃくちゃ上手ですもんね」
「まあな」
口八丁手八丁は霊幻のオハコである。
「……まあ、超能力だけじゃ仕事は回らないってこった。ところでアンタ、さっきから何ごそごそしてんだ？」
ヨシフに言われて、全員の目が芹沢の机の端っこに向けられる。
「……ん？私かね？」
「そうだよ」
最上は顔を上げる。
「魔除けの札を作っていた。まさか新隆くんがそんな無防備な状態で仕事していたとは思わなくてな……」
ほれ、と最上は５枚のお札を全員にかざして見せた。
「うわ、最上啓示のお札とかめっちゃ効きそう」
「本来なら１枚１００万は貰っていたが」
「ひぇっ！？」
「これは私が自分のために作ってるものだからな。気にせず受け取りたまえ。……私の目の届かない所で死なれては困るからな」
「最上さん……」
感動して目を潤ませる霊幻に、
「魂を捕まえられなくなるからな」
エクボがイタズラっぽく皮肉を言った。
「悪霊が魔除けの札、とは」
花沢が腑に落ちない顔をしている。
「悪霊だろうが生きてる人間だろうが、霊力を込めればこういう道具は作れる。……呪を込めるから、しばらくそっとしておいてくれ」
ざっ、と最上が芹沢の机の上に札を広げる。
「観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時。照見五蘊、皆空。度一切苦

厄……」
朗々と暗誦される般若心経に、思わず全員が聞き惚れる。
最上が手をかざしているお札は、次第に青い光を放ち始めた。
「すげぇ……」
霊幻の声に最上はわずかに得意そうに目を細める。
「羯諦。羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。般若心経。……ふむ、こんなところか」
「最上さんお経使うんだな……」
「ん？ああ、生前は祝詞も使っていたが、悪霊の身分で八百万の神々を呼び出したらろくなことにならんからな」
「そりゃあ神罰を喰らう可能性高いわな」
エクボの言葉に最上は頷く。
「その点日本の仏教は色々雑だからな。使いやすい」
「へえぇ、そうなんだ……」
霊幻の言葉に最上はあきれたように目を細める。
「そんなことも知らずにこの商売してるのかね、君は」
「うっ……いや知ってたけど、ド忘れしてたな〜、なんて」
そっと霊幻は仏教の本をポチる。
はぁ、と最上がついたため息は、霊幻だけでなく、むしろ将を焦らせた。
（俺は霊幻さんを守る圧倒的な力も無ければ、その為のお札も作れない）
青年は無力感に打ちのめされていた。

※

それから、何度か霊幻と除霊に出掛けて。
将も少しずつ相談所の仕事に慣れてきたころ。
両親との食事の帰り道で、見慣れた蜂蜜色の髪を見つけた。
「あれ？霊幻さんじゃん。おーい」
気軽に手を振った将に気付かず、足早に霊幻は立ち去っていく。
「将、あの男は今はプライベートだ。そっとしておいてやりなさい」

複雑な顔をして統一郎がかけた言葉に、ざわりと将の胸が騒ぐ。
霊幻の『悪癖』が出たのだと、将は理解した。
「親父、お袋、今日はここで。じゃあまた明日！」
「将！」
止めようと伸ばした手を、そっと統一郎は握ってためらう。
……息子にかけるべき言葉に、統一郎はまだ迷っていた。

「れーげんさんっ！」
「うわっ、ショウくん！？」
思わぬ声を掛けられた霊幻はびくっと飛び上がる。
「どこ行くの？俺も連れてってよ」
「大人の遊び場だから、子供は帰んなさい」
「発展場、とかいうやつ？」
「……そうだよ。だから……」
「行ってみたい！」
ぽかん、と霊幻は虚を突かれて将を見る。
しばらく考えてから、興味があるなら慣れている霊幻が付き添った方がいいだろう、と判断したらしい。
「……ゴム持ってるか？」
「え、無い」
「タチ志望だろう？最低限のマナーだ。サイズは？」
「いつもL使ってる」
「ちょっと待ってろ」
霊幻は鞄の中から携帯サイズのコンドームの箱を取り出して開封し、半分ちぎって将に渡した。
「……続けて通うなら今度は自分で用意するんだぞ」
「うぃっす」
霊幻はきびすを返して足早に歩き出す。
「霊幻さん、急いでんね！？」
「明日も仕事だからな。早く男を捕まえないと、明日に響く」
チラッと携帯で時間を確認しながら、霊幻は地下のバーに入っていく。
「身分証をご提示ください」

入り口のガードマンに霊幻は免許証を、将は学生証を見せた。
「お客様はノンアルコールでお楽しみください」
ガードマンは将に営業スマイルを向けた。
「どうも。ショウくん、まずこのカウンターで飲み物を選ぶんだ。こっちのページがノンアルな。タチなら白系、ネコなら赤、どっちでもOKならピンク系を選ぶ。……俺はコレください」
将も霊幻に倣って白系のノンアルコールカクテルを選ぶ。
「霊幻さんもノンアルなんだ？」
「ん、まあ気分によるが……基本的にはノンアルかな。酒入ると勃ちが悪くなるし」
へえ、と返しながら将は店を見回す。基本的には普通のバーに見えた。……客が男同士でイチャイチャしている以外は。
「お兄さん、フリー？」
にこっ、と美少年に笑いかけられて将は心臓が跳ねる。
「おっ、上手くやれよ」
そっと霊幻は囁いて、将から離れてカウンターに座った。
「お兄さん、こういうところ不慣れなの？」
「ん、あ、うん。初めて」
「そうなんだぁ。あのオジサンに連れてきて貰ったんだ？」
「うん……」
（あ……）
霊幻の隣に、茶髪の若い男が座ったのを見て、将の心がざわめいた。
「お兄さん、普段は何してる人？」
「大学生だよ」
将の目は霊幻に釘付けだ。
霊幻は茶髪の男と笑い合って、ひそひそと耳打ちをしている。
男が霊幻の腰に手を回したのを見て、将は我慢が出来なくなった。
（だめだ。何か嫌だ）
「ごめん、俺用事が出来た」
「お兄さん！？」
美少年を振り切って、将はカウンターに向かった。
「ん、ふふ……ホテル行く？」

「いいの？」
むつみあう霊幻と男の甘ったるい声に、将はムカムカしてくる。
「霊幻さん！」
将は男と反対側にどっかと座った。
「わ、びっくりした。どうした？上手くいかなかったのか？」
「……俺、霊幻さんと飲みたかったのかも」
すねるように甘えてみる。こういう年下しぐさに霊幻が甘いのを、将はこの数日間でよく理解していた。
「……しょうがないな。ごめんな、知り合いなんだ」
やんわりと霊幻は茶髪の男を断る。
「残念。また連絡してよ」
男は電話番号のメモを霊幻に渡して席を立つ。
将は悪いことだと思いながらも、男より自分を優先してくれた霊幻に嬉しくなった。
「ショウくん、何か食べる？ここ、ご飯も美味しいんだよ」
メニューを取って将に笑いかける霊幻に、思わず手を伸ばす。
「え」
唇に、頬に、髪に触れる。さっきの男が触れた所を、上書きするように。
「ショウく、」
じ、と空色の瞳に見つめられて霊幻は咄嗟に言葉が出なかった。
が、下半身に触れようとした手を、パシッと掴む。
「それ以上はダメだ」
「なんで？さっきの男には触らせてたじゃん」
「……っ、」
「ねえ、霊幻さん、誰でもいいんなら、俺でもいいんだよな？」
それはちっぽけな独占欲だった。貴重な自分に甘い大人を、独り占めしたい気持ち。
それに名前を付けないまま、将は霊幻に手を伸ばす。
「いやいいワケないだろ」
だがそれに霊幻はしらっと返した。
「俺は基本的に知り合いには手を出さないんだよ。トラブルの元だからな。それにショウくん、君は選ぶ側なんだから。さっきの美少

年みたいな上物を抱けるんだぞ？なんで俺なんかをわざわざ選ぶんだよ」
将は口を尖らせる。
「それって俺の自由じゃねえの？誰を選ぶかとかさぁ。それに知り合いとは寝ない、って、説得力無さすぎ。……律とかと寝てんじゃん」
それを言われるとどうしようもない。霊幻はがっくりと項垂れた。
「……なんで俺なんだよ」
「うーん、興味本位？単純にどんなもんか気になる」
「あ、そう……」
霊幻はため息をついて席を立つ。
「……じゃ、ホテル行く？」
「行く！」
無邪気な返事に、また霊幻はため息をついた。

ホテルの部屋についても、将は興味深そうに色々とみている。
「……飲み物とかオモチャとかは有料だから、気をつけてな」
「はーい」
霊幻はソファーに鞄を置いて腰掛け、持参したペットボトルのお茶で口を潤す。
「……じゃあ俺、風呂入ってくるから」
立ち上がって風呂場に向かった霊幻を、将が超能力で拘束する。
「あ、ちょっと待って」
「う！？こらっ、実力行使の前に口で言いなさい！！」
「ごめんごめん。……脱がせてみていーい？」
「はい？」
「いや、男を脱がせるってどんな感じかなって思って」
「本当に興味本位だな……いいよ」
超能力を解いた将は霊幻の腕を引いて、ベッドに押し倒す。
ベッドに無防備に寝転がるいつものグレースーツの霊幻新隆を見て、心臓が跳ねた。
（すごい、本当にヤっていいんだ）
茂夫たちが、ヨシフが、いつもは丁重に守っている霊幻が、今、手

の中にいる。
それは何とも言えない優越感を将にもたらした。
「……ここまでやってて何なんだけどさ、俺多分勃たないんだよな。ごめん」
「ん？あー……ノンケには良くあることだから気にすんな。気が済むまで遊べばいーよ」
「……ありがとな」
どこまでも霊幻は将に優しい。
その優しさが、何故か将を切なくさせた。
将は霊幻のピンクのネクタイを抜き取る。
「！」
霊幻は少し息を飲んだ。
将は霊幻の上着のボタンを外してくつろげ、ぷちぷちとシャツのボタンを外していった。
「はは、なんかプレゼント開けるみたい。ワクワクすんね」
「……そう……」
将くんの無邪気さが気恥ずかしくて、霊幻は頬をうっすらと染めて顔をそらした。
「肌白っ」
「そうか？普通だと思うが……」
「いやー女の子よりも白いって相当だと思うよ」
言いながら、将は無遠慮にペタペタと霊幻の胸や腹を触る。
「ん、ふふ、くすぐったぃ……、っ！」
将の指が乳首をかすめて、ピクリと霊幻の身体が跳ねた。
「ココ気持ちいい？」
気が付いた将がぎゅっとつまんだり、コリコリと指先でこねたりし始めた。
「あ、あぁっ、きもち、いいっ」
身悶えする霊幻が上げる声に将はドキドキする。
（そんな声で喘ぐんだ……）
低く甘い声が、悩ましく掠れて耳を刺激する。
「あ！」
れ、と将が舌で乳頭を舐め上げると、ぎくりと霊幻の身体がこわ

ばった。
「あ……っ！あぁぁ……っ！ゃ、っ……ショウくん……！」
くちゅくちゅと口でなぶられて、もどかしそうに霊幻の腰が揺れた。
「……なんか、ほとんど女の子と変わんねーんだな。……でもココは、分かりやすくておもしれーかも」
将にズボンの上から局部を掴まれて、思わず霊幻は狂おしげな息を漏らした。
「感じたんだ？」
「ん……」
素直に頷く霊幻に、ゾクゾクと将は愉悦を感じてしまう。
（あんまりこの感じは味わいたくなかったなぁ）
大の男を組み敷き、蹂躙する──征服感。
（親父に似てきてるみたいで嫌だわ〜）
だが、自分の手で身悶える男に、悦びを感じてしまっているのも事実で。
「ン、っ！」
布越しに陰部をシゴかれて霊幻は眉根を寄せる。
（エッロい顔するよなぁ……）
将はベルトを抜いて霊幻のズボンに手を掛けた。
「うわ、めっちゃカウパー出てる」
「……っ」
シミで濃くなったボクサーパンツを指で弾かれて霊幻は赤面する。
「こんなガキにいじられて、なっさけねーな、霊幻さん？」
こんなことを言うつもりは無かった。だけれども、これを言われた霊幻がどうなるのか見てみたかった。
霊幻は驚いたように将を凝視し、そして耳まで真っ赤になって唇を噛んだ。
（う、わ──）
それでも投げ出される身体は、将への生け贄だ。
無抵抗の獲物に唾液がわいて仕方がない。
何度も唾を飲み込みながら、将は霊幻からボクサーパンツを奪い取った。

「あ……一応家で洗って来てるけどさ、まだシャワー浴びてないから……あんまちんこ触んないでっ、んぅっ！？」
むぎゅ、と陰茎を握られて、霊幻は足をこわばらせる。
「話聞いてた！？」
「聞いてた聞いてた」
言いながら将は親指の腹で鈴口をくちゅくちゅといじり、びく、びくっと引き攣る霊幻の鼠蹊部を撫でる。
「あ、ぅ……っ！やだ、って……！」
「もっとヤダヤダ言ってよ、霊幻さん。興奮すっから」
「馬鹿っ……！ほ、ほんとにやなんだってばぁ……っ！
ひ、っぅ！？う、うそだろ！？」
ぺろ、と先端を舐めた将から、逃げようと霊幻の身体が動く。
「だ、ダメぇ……っ！あぁ……っ！」
くぷぷ、とヨダレだらけの口の中に飲み込まれて、霊幻は思わず将の髪を掴んだ。
「しょ、ショウくん！！ダメだって、汚いから！！」
（石鹸の味しかしないじゃん）
「こ、コラっ！やめっ……ひ！？」
ぐいぐい髪を引っ張ってきて鬱陶しかったので、少し将は根本に歯を立ててやった。
「しょ、ショウくん……？こ、怖いことやめてくれよ……っ！っん、ん……っ！」
ぐち、じゅると舌でなぶられて、ぴく、ぴくとその度に霊幻の腹筋がひくつく。
「ぁっ、ぁあ……っ、そこ、やめてぇ……っ」
（ふーん、カリの辺り好きなんだ）
霊幻の弱点を見つけるほどに将は楽しくなる。
「もっ……イっちゃうからあっ……！はな、離して……！」
ぐい、と弱々しく顔を引き剥がそうとする手をぐいと掴んで、将はずるるるっと吸い上げた。
「ゃだあ……っ！」
悲鳴のような声を上げて霊幻は達した。
そのあえかな弱々しい様子に、将は目を細めて満足そうに霊幻を見

下ろした。
「はっ……はっ……」
涙目で胸を上下させる霊幻に、口に精液を含んだ将がずいっとせまる。
「え！？は！？やだ、嫌だからな！！っんぅ……！！」
アゴを引かれて口を開けさせられ、霊幻は口の中に自らの精液を流し込まれた。
「ん〰〰〰〰！！」
足をバタつかせて、ぽかぽかと胸を叩いても、将が抑え込む力は弱まらない。
「ん……ん……」
観念して、生理的な涙を一筋流しながら、こくこくと霊幻は自分の精液を飲み込んだ。
「……ひどい」
「あはは、ごめん」
涙目で睨まれて将はゾクゾクする。
（問題無く勃ちそう）
というか、もう勃っていた。
「挿れるのってココ？」
「ん゛ぅっ！？ちょっと、突然……！！」
無遠慮に指を突っ込まれて、霊幻の身体がぎくりと固くなる。
「んー、よく見えねーな」
将がゴソゴソとポケットからスマホを出してきて、霊幻はぎょっとする。
「ちょっと、写真はさすがに……！！」
「ああ、違う違う。ライトで照らすだけ」
２本指でくぱ、とアナルを開いて、その中を将はライトで照らして見る。
「やっ……！」
「おぉ〰、ピンクでエッロ」
腸液とローションでぬらぬらと光る蠢く肉壁を、マジマジと将は眺める。
「コロシテ……」

「何言ってんだよ」
羞恥に両手で顔を隠す霊幻に、将は呆れたように言う。
ピリ、とコンドームの封を切った。
「んじゃ、挿れんぜ」
ジーンズから取り出した逸物にくるくるとゴムをつけてから、霊幻の手をどける。
「霊幻さん、足、自分で持っててよ」
「……」
霊幻は目を伏せながら、自分で挿入しやすいように足を持つ。
「早く……終わらせてくれよ」
「寂しいこと言わないでよ」
「ん、んんっ……！」
ずぐ、とこれまた無遠慮に奥まで挿入された性器に霊幻はくぐもった声を上げた。
「うわ、めっちゃ気持ちいい」
「ん……っ、ん……っ！」
容赦のないピストンに霊幻は追い詰められてぎゅうぅとシーツを掴む。
「霊幻さん、名器とか言われたこと無い？」
「たまにッ……、あぁっもうダメぇっ♡♡♡」
のけぞった霊幻がビクンビクンと痙攣した。
「うわっ何！？」
ぐんと内部に引き摺り込まれるように搾られて、思わず将も達する。
「はーっ♡……はーっ♡……ぎも゛ぢい゛い゛っ……♡」
「良かったじゃん」
新しいコンドームに付け替える将を、ぐいっと霊幻は抱き寄せる。
「もっと、いじめて……っ♡」
ゾク、と将の背筋に嗜虐感が走った。
「っ、後悔すんなよ……！」
「あ゛ぁ゛っ♡キたぁっ♡♡♡」
ズン、とまた奥まで貫かれた霊幻は、その白い喉を将の目に晒す。
「イイっ♡イイとこにっ♡当たってるぅっ♡♡♡」

「ふーん、どこ？教えてよ」
「え、っ」
将は腰を止めないまま、霊幻の手を下腹部に誘導した。
「どこが霊幻さんのイイとこなの？」
こく、と唾を飲み込んでから。
「こっ、ココ……♡」
くっ、と霊幻は下腹を軽く押さえた。
「そっ、か！」
「ん゛あ゛っ♡♡♡」
ポイントを目掛けて将が打ち込み、霊幻が思わずしがみつく。
「だっ、だめぇっ♡またっ、またメスイキするぅっ♡」
「いーじゃん」
ごっ、ごっと前立腺を穿ちながら、将は霊幻を見下ろす。
「イけ」
「〜〜〜〜っ♡♡♡♡」
目の前をチカチカさせながら快感に堕とされた霊幻のひくつく内部に、将もまた心地よい絶頂を味わった。

※

あれから3戦ほどして。
ようやく将は満足したのか、シャワールームに消えていった。
（喉痛った……）
ベッドから這いずり出た霊幻は、かく、と床にへたり込んでしまって驚く。
（嘘だろ、足ガクガクじゃねぇか）
何とかテーブルに手を伸ばして取ろうとしたお茶を、ひょいと将が取り上げた。
「コレ？無理すんなよ」
こぽん、と口に含んで。
「ん……」
将は霊幻に口移しで飲ませてやった。
「んぁっ……ちょっ……ん、んんっ……」

そのままディープキスに移行して髪をかき混ぜてくる将を、霊幻は困ったように受け止める。
「はぁっ……」
「俺さぁ、割とイチャイチャしたい方なんだよね。セックスの後とか」
「へえ……」
「割と彼女とか大事にする方なのよ」
「その割にはＳっ気凄かったが」
今更、将は焦る。
「いやあれはいつもはあんなことしないって言うか……なんだろ、霊幻さんがいじめてってオーラ出してるっていうか」
「なんという暴論」
「とにかく！霊幻さんなら許してくれるって思ったの！」
仕方ないな、という風に霊幻はため息をつく。
「……俺さぁ、わりと彼女途切れない方なんだけどさ、」
「うわムカつく」
「だけど、いっつもフラれるの俺の方なの。『怖い』っつって」
霊幻は眉をひそめる。
「『得体が知れない』とか言われるんだよね。超能力見せてあげるとさぁ、最初は喜ばれるんだけど、次第に連絡が途切れがちになって、」
将は力無く笑う。
「最後はファミレスとかで男友達同伴で別れ話されんの。キッツイよなぁ……。でもさぁ、超能力も俺の一部だから、恋人には知ってて欲しいってゆーか……」
「……その内、超能力も認めてくれるコが現れるさ」
「うんまあ目の前に居るっていうか」
「……うん！？」
霊幻は思わず後ずさる。
「霊幻さんさぁ、良く考えたらあの影山茂夫とも対等にやってるし、もしかしたら理想の恋人なんじゃね？とか思ってさあ」
てれ、と赤くなった頬を将が指でかく。
「勘違いだ。気のせいだ。ハイこの話終わり！！」

「という訳で、霊幻さんと付き合おうかなって思うんだけど」
「頼むから霊幻さんのお話し聴いて！？！？」
「……ダメ？」
きゅーん、と子犬の鳴き声が聞こえて来そうな上目遣いで将がオネダリする。
「駄目です」
「えーっなんでー！？」
「むしろ俺が『なんで』だよ！！ショウくんいつ俺のこと好きになったの！？！？」
「さっき」
「さっっっっっきっっっっっ！！即物的すぎる！！もっと考えなさい！！」
「……考えた！霊幻さん付き合って！！」
「真面目にやりなさい！！」
将が口を尖らせる。
「何で駄目なわけ？霊幻さん今、恋人いないよね？」
「うん」
「俺のこと嫌い？」
「普通に好きだけども」
「身体の相性も良かったじゃん」
「うーん、まぁそうだけどさぁ……」
「じゃあ何で恋人になるのは駄目なんだよ」
「なんで……？」
動揺した霊幻の目がさまよう。
「そういえば俺、なんで恋人作らないんだっけ……？」
「え？」
「と、とにかく！駄目なものは駄目です！！ほら明日も仕事だからそろそろ解散！！」
ベッドに這い上がってシーツを被った霊幻を、その上から将は抱きしめる。

「「「「「「「「逃がさない」」」」」」」」

続